

商品開発、領事館職、地域交流

企業活動そのものが社会貢献



代表取締役社長 上山直英氏

世界で初めて除虫菊に含まれる天然殺虫成分を解明し、日本の家庭用殺虫剤産業のさきがけとなった、キンチョウこと大日本除虫菊株式会社。同社は今年で創業124年、大阪・土佐堀通りに本社を構えて94年になる。

もともと除虫菊はユーゴスラビア（現セルビア共和国）が原産。同社の事業は、1890（明治23）年、創業者の上山英一郎氏がアメリカの植物会社社長からその種子を入手し、世界初の『蚊取り線香』を考案したことにはじまる。

その後、英一郎氏は自ら「除虫菊栽培書」を作って全国の農家に無料で配付。全国新聞に「除虫菊種苗大々的分譲」と広告するなどして、原料の安定確保に努めた。やがて生産量は増大し、1920年代には日本の除虫菊の輸出量は、本家ユーゴスラビアに匹敵するほどに。1929（昭和4）年、ときの国王・アレキサンドル1世は、除虫菊の用途開発と生産量を拡大した英一郎氏の功績を称え、大阪駐在ユーゴスラビア王国名誉領事の称号を贈った。

その後、第二次世界大戦や東欧の政情不安などから同社との親交が途絶えていたが、2004（平成16）年、現社長の上山直英氏のもとに、再び在大阪セルビア・モンテネグロ（当時／旧ユーゴスラビア）の名誉総領事就任が打診された。

「突然のお話に驚きましたが、当社が今日あるのは代々の経営者が同国と親交を育んできたからこそ。会社として喜んでお引き受けすべき仕事であると思いました（上山社長）」。1世紀を越える日本とセルビア両国の友好関係は、同社を介してさらに深められている。

上山社長はまた、「当社の事業そのものが社会貢献活動」という。日本脳炎の罹患者が近年激減しているのは、医療の進歩もさることながら、同社製品によって感染源の蚊を寄せつけない習慣が根づいたことも大きい。そうして得た経営資源の一部を、同社は、大阪府の文化振興基金創設への援助をはじめ、天神祭への『能船』への協賛やbjリーグバスケットボールチーム『大阪エヴェッサ』へのスポンサー参加、和歌山県での森林保全活動などに活用。地域文化の育成や地域社会との密接な関係づくりにも意欲的である。

また、キンチョウといえばユニークなテレビCMでも知られている。商品は夏の一時期に集中して売れるため、CMはインパクトを最重視。『ハエハエ、カカカ』『油とちやうちやう』『タンスにゴン』などのフレーズとともに、キンチョウの名前を日本中の茶の間に浸透させてきた。なかでも意表を突いたのが、『ルーチョンキ』。商品名をあえて逆読みしたのであるが、訴求力を高めるためには、商品名を正しく伝えるというCMの大原則すら覆してしまうのが同社ならではの活動。

「売れるCMを作るのはプロの仕事。新しく、珍しく、奇抜な発想であれば、それ以上に私たちが注文をつけることはない（上山社長）」。CM制作に対してはビジネスライクな考えの上山社長であるが、自由な発想を大事にするという気概が結果として有能なクリエイターを育て、社会貢献を果たしているのも事実である。



本社（手前は国立国際美術館）



本社受付に掲げられたセルビア共和国名誉総領事館の証



除虫菊を栽培保存（尾道市立美術館内）



天神祭「能船」への協賛



bjリーグ「大阪エヴェッサ」スポンサー参加

大日本除虫菊株式会社

大阪市西区土佐堀1-4-11 <http://www.kincho.co.jp/>